

びわこ学院大学 令和八年度 一般選抜（国語）

（注）設問で指示をした字数には句読点等も含みます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

すっかりごぶさたしていた絵本と出会いなおせたのも、嬉しいことだった。日常とは（１）【A】違う言葉の世界が、そこにはある。絵やお話が子どもの想像力を刺激し、文字というものの存在にも気づかせてくれる。楽しくて素敵な場所だ。大人になると「この本が面白いことはわかった。では次の本を読もう」となるのだが、子どもはそうではない。「この絵本が面白いことはわかった。だからまた読んでほしい」となる。読み終えるとすぐ「もっかい！（もう一回）」と言われて、うんざりした経験をお持ちの人も多いだろう。繰り返しのなかで、絵本の言葉が栄養になってゆく。

私自身も絵本の大好きな子どもだった。三歳のころのお気に入りには『三びきのやぎのらがらどん』で、全ページを丸暗記していた。まだ文字は読めなかったが、どこに何を書いてあるかを覚えていて「文字が読めるふりこっこ」をして遊んでいた。親がテープレコーダーに録っておいてくれたのを、後年得意な気持ちで聞いた記憶がある。が、読んでやる立場になって気づいたのだが、これは私がすごいのではなく、親がすごかったのだ。幼い子どもが丸暗記してしまうほど、何度も何度も読んでくれたのだから。「チョキン、パチン、ストン。はなしは おしまい。」……瀬田貞二のリズミカルで美しい日本語は、今も心に蘇る。

ここで、現代の子ども（と、大人）から絵本の時間を奪う強敵について、少し考えよう。敵の名前はスマホ。あるいはタブレット。動画やゲームなどの魅力的なコンテンツが山盛りで、子どもを静かにさせるには魔法の道具である。

今の時代、これから生きていく世代にとって、スマホやネットなしの暮らしは考えられない。だから全否定するつもりはない。ただ、子どものうちは、なるべく触らせないのが吉だと思う。一度触れてしまったら、特に幼い子どもは抗いようがない。大人のほうも、そのラクさに、ついすがつてしまう。私が子育てをした2000年代、スマホはなかったものの、懇意にしていた小児科の先生から「三歳まではテレビを見せない。そういう英才教育をしてはいいがですか」と言われた。英才教育とは大げさな、と思ったが、今ならよくわかる。早期に何かを与えることよりも、電子機器との出会いを遅らせることのほうが、実は遥かに難しい。そういう環境をキープしてやるには、ありえないほどの手間ひまがかかる。（２）それこそが英才教育なのだ。残念ながら私は、（３）アンパンマンのビデオを擦り切れるほど見せてしまったので、偉そうなことは言えない。ただ、絵本の読み聞かせは、たっぷりしてやった。ビデオ（今なら動画）と読み聞かせの大きな違いは、（４）生身かどうかが、受身かどうかが、だろう。

絵本を読んでいるとき、子どもが「ん？」と戸惑った顔をすれば、意味がわからないのかと察してやることができる。ゆつくり読んだり、少しかみ砕いた表現に言い直してやったり。好きな場面だとわかれば、大げさに繰り返し読んでやることもできる。ストーリーとは関係のない絵の細部に興味を示せば、脱線してその小さな花や石ころの話をしてもいい。読み聞かせというのは、生きた言葉によるオーダーメイドの読書なのだ。スキップも兼ねるし、コミュニケーションのきっかけにもなる。ビデオや動画では、そういったことはなく、ただ時間通りに画面は流れてゆく。音も動きも、想像の余地のないほどたっぷり付けられて。

想像といえば、こんなことがあった。息子が大好きだった『ころころ』という絵本がある。カラフルな玉たちが、ころころころころ、ひたすら坂道やら嵐の中を転がっていくだけで、私にはどこが面白いのかよくわからなかった。だが、ある日、息子が一つの玉を指さして「この子」と言ったのだ。「この子？」と怪訝に思いつつ、はっとした。玉の一つ一つが「この子」に見えているのか。だとしたら、なんて【B】の物語だろうか。だから飽きないのか。子どもの想像力、おそろべし、である。

『花さき山』という絵本を読んだときに、ふと思いついて、息子の花は咲いているかと聞いたことがあった。人のためになにか一ついいことをすると、人知れず花が一つ咲く、それが花さき山だ。「たくみん（息子の愛称）のはねえ、白い花」というのが答えだった。幼稚園で、お友だちが牛乳をこぼして泣いてしまったときに、一緒に拭いてあげたのだと言う。そんな話は初耳で、絵本があいだにあるからこそ聞いたことだなと思った。園から帰ってきた息子に「今日どうだった？ 今日どうだった？」と前のめりに尋ねても、いつも「ふっ」とそっけない返事だったのに。（５）生身のコミュニケーションツールとしての絵本である。

生身か受身かという点では、ゲームも（６）要注意な強敵だ。ゲームの中では、いくら動いても、風や匂いや痛み等を感じることはない。決められたルールの中で、決められたことをクリアしてゆく。そこにストーリー性があったり、仲間との連帯という喜びがあったりするのは理解できるが、それはつまり子ども時代を過ごすのはもったいない。五感を刺激されることで、成長してゆく時期なのだから。

ゲームについては、息子もやりたがってキリがなかったので一計を案じた。

「ゲームが面白いのは、わかる。でもね、これはおやつなんだよ。ケーキやチョコレートと同じ。おいしいからって、朝はケーキ、昼はポテチ、夜はチョコレートだったら、大きくなれないし、病気になるってしまうよ。だからゲームも、おやつみたいに分量と時間を決めて、楽しくやろう」

このたとえは説得力があったようで、息子も「うまいこと言うね!」と納得していた。そしてゲームをした時間と同じだけ本を読むというルールも付け加えた。頭ごなしに否定したり、規則を押しつけたりするのでなく、「おやつ」という身近な(7)比喩は、子どもの心をとらえてくれたようである。

その後、小学二年生から、縁あって沖縄の石垣島に住むようになったのだが、いつのまにか息子はゲームをしなくなった。「そういえば最近、全然ゲームしないね」と言うと、おやつ以上にうまい答えが返ってきた。「だってお母さん、(8)オレが今マリオなんだよ!」。

「オレが今マリオなんだよ」島に来て子はゲーム機に触れなくなりぬ

大自然の中で、友だちと一緒に暗くなるまで遊びほうける日々。滝つぼに飛びこみ、海で釣りをし、サトウキビ畑で鬼ごっこ。その冒険は、まさに自分自身がゲームの主人公になったような気分だったのだろう。五感をフルに活用することは、言葉を鍛える土台のようなものではないか、と思う。「めいっばい遊ぶ」ことは、机の上の勉強と同じくらい、いや大人になってからは出来ないという意味では勉強以上に、大事なことだ。

息子は、石垣島でもやや辺鄙などところにある全校児童十数名の小学校に通っていた。クラスは複式学級で、いわゆる学習面では(a)ジャッカン<sup>①</sup>の不安はあったものの、それを上回る魅力があったので移住を決めた。魅力とは三つ。(b)アットウテキ<sup>②</sup>な自然と、みんなで子育てをする地域社会と、子どもだけで野放図に遊べる環境だ。都会での子育てで、懸命に努力して補ってきた三つだが(そしてなかなか足りていないという実感があった)石垣島では、やすやすと手に入る。お勉強のほうは、自分が補ってやればいい。そっちは、むしろ得意だという(c)ジフ<sup>③</sup>もあった。

学習面では……などと失礼なことを言ってしまったが、島の子どものたちの知恵には目を見張るものがあった。道を歩いていると、食べられる草、食べられない草、ヤギが大好きな草などを教えてくれる。近所にスーパーがなかったので、私自身、長命草(という食べられる草)にはずいぶん助けられた。魚は見事にさばくし、釣りに行くときには「弓張り月」なんて言葉を使って潮の満ち引きを考えている。大きな魚を捕まえた少女は、暴れる大物の背骨を足で踏んで折っていた。(d)センド<sup>④</sup>を保ったまま大人しくさせるのだとか。児童の数が少ないので、必然的に年齢の違う子どもが一緒に遊ぶことになる。たとえば鬼ごっこ<sup>⑤</sup>の時には「一年生には二回続けてタッチしない」など、独自のルールを話し合って決めていた。ヤドカリに息を吹きかけて次々貝殻から追い出す遊びに息子が熱中していると「ほんとうに欲しい貝のだけにしたいやれ」と、にいにいが(e)サトす<sup>⑥</sup>。親に命の大切さを説かれるより、ずっと(f)ギく<sup>⑦</sup>ようだった。

(俵万智『生きる言葉』新潮社)

(注) 「瀬田貞一」……日本の児童文学作家・翻訳家・児童文学研究者。

「にいにい」……沖縄の方言。「お兄さん」兄弟や親せき以外の男性をさすこともある。

問一 傍線部(a)～(f)のカタカナを漢字で答えなさい。

- (a) ジャッカン (b) アットウテキ (c) ジフ (d) センド (e) サトす (f) ギく

問二 傍線部(1)「【A】違ふ」とは「他のものとは違う。わずかだが他のものとは違う味わいがある。」という意味です。

【A】にあてはまる漢字二字を答えなさい。

問三 傍線部(2)「それ」の指す部分を、文中より十五字以上二十字以内で抜き出さないさい。

問四 傍線部(3)「アンパンマンのビデオを擦り切れるほど見せてしまった」のは、アンパンマンのビデオがどのような存在であったからか。文中より五字で抜き出さないさい。

問五 傍線部(4)「生身かどうか、受け身かどうか」について、次の(一)・(二)の各問いに答えなさい。

- (一) (二)という「生身」、「受け身」とは、それぞれ何のことか。文中のことは答えなさい。  
(二) 「生身」、「受け身」と言えるのはなぜか。その理由を、それぞれ文中のことはを用いて答えなさい。

問六    Bに入る四字熟語を次より選び、記号で答えなさい。

ア、奮励努力

イ、誠心誠意

ウ、一心不乱

エ、波乱万丈

オ、無我夢中

問七 傍線部(5) 「生身のコミュニケーションツールとしての絵本」とあるが、筆者はどのように思ったからそのように表現したのか。文中のことはを用いて答えなさい。

問八 傍線部(6) ゲームも「要注意」だとするのはなぜか。生身という観点から答えなさい。

問九 傍線部(7) 「比喩」について、ゲームをおやつに例えているが、このような比喩を何というか答えなさい。

問十 傍線部(8) 「オレが今マリオなんだよ!」とあるが、そのように思ったのはなぜか。文中のことはを用いて五十文字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

麻生<sup>あせい</sup>人生は高校生の時にいじめに遭い、不登校から引きこもりになった。両親は離婚し、頼りだった母親も突然家から出て行ってしまい、座卓の上に残されていたのは、当面のお金と年賀状の束だけ。「もう一度会えますように。私の命が、あるうちに」と書かれた祖母マーサさんからの年賀状を読み、人生は祖母に会いに行く。ところが祖母マーサさんは認知症になっていた。

「おばあちゃん、もと通りになるのかな」

消え入りそうな細い声。田端さんは微笑んで答えた。

「そうだね。そう信じて、話しかけてあげるといいよ」

いくら話しかけても、一生けんめい尽くしてあげても、無反応。介護をする家族にとって、それがいちばん辛いことに違いない。どうせ治らないんだから、話しかけるだけ(a) ムダだ。そんなふうと考えてしまうのが、介護する側にもされる側にも、実はいちばんよくないんだよ、と田端さんは言った。

「君たちが、おばあちゃんに笑いかけて、おばあちゃんの大好きなことを話してあげて、そしていつも『ありがとう』って言い続けたら、それは絶対におばあちゃんに伝わるはずだよ。もうもとは戻らない、とは決して考えずに、具体的に、現実的な希望をひとつでも持つことが大切なんだ。どんな小さなことでもいい。明日目が(b) サメたら、おばあちゃんが何か話してくれるかも。笑ってくれるかも、つてね。おばあちゃんの田んぼでお米がとれたら、おにぎりを作ってくれるかも、とか」

どんなことでもいいんだよ。普通の人にとっては、別にどうってことないかもしれないけど、君たちにとっては、こんなことがあったらいいなあ、と思えるような、小さな希望で。

人生は、田端さんの一言一句に、(1) 自分の耳が、心が震えるのを感じた。

具体的に、現実的な希望。小さな希望。

そうだ。おれ、ばあちゃんの作ってくれるおにぎりが食べたい。ばあちゃんは、おれが梅干しを苦手なことをちゃんとわかってくれていて、味噌とか佃煮とかを入れてくれた。ごろんと大きくて、しつとりと海苔が巻いてある、あのおにぎり。

いまはもう、どんなに望んでも、食べられなくなってしまったおにぎり。

同時に、人生の脳裡に浮かんだのは、母が作ってくれたおにぎりだった。

かつては、母が漬けた梅干しを入れたおにぎりが何よりの好物だった。いまとなつては、あのおにぎりもまた、二度と食べることはできないのだ。

たったひとつのおにぎりは、たとえどんな高級レストランに行っても、決して手に入られないものになってしまった。

「おれ、ばあちゃんのおにぎりが食べたい」

人生は、無意識に、そうつぶやいた。

「でもって、おれも、自分で作ったお米で、ばあちゃんにおにぎりを作ってあげたい」

志乃さんの隣に、身を隠すように座っていたつばみが、「あたしも……」と、また消え入りそうな声を出した。

「あたし、料理、下手だけど。毎日作っても、全然、おばあちゃんみたいに上手になれないけど。でも、あたしもいつか、自分のお米で、おばあちゃんに、おにぎりを作ってあげたい……」

志乃さんと田端さんは、目を合わせて微笑んだ。田端さんは、「そう。そういうのが、いいんだ」と明るいう声で言った。

「それ、すごく具体的で、現実的じゃないか。決してかなわない夢じゃない。がんばれば、きっと手が届く『(2)希望』だ」

そのとき、ばあちゃんが、大きく、こつくりとうなずいた。人生とつぼみは、(3)目を見開いてばあちゃんを見た。ばあちゃんは、小舟でも漕ぐように、もうひとつ、大きくうなずいた。けれど、やはり、目は虚ろだった。

囲炉裏に掛かっていた鉄瓶の湯でそば茶をいれ、そのまま、皆で話しこんだ。

田んぼ作り、米作りのためには村人たちの好意に甘えなければならぬ。特に、田植えは特別に大変だ。ばあちゃんは、近所の田植えが終わって一、二週間後に「自然の田んぼ」の田植えをすることになっていた。この時期は、農家の人は目が回るほど忙しいのだから、ばあちゃんもひどく気を遣っていたようだ。

「でもまあ、若い衆たちも、マーサさんの田んぼは特別だからって、結構楽しみにしてたみたいよ。たった一反だから、みんなやればそんなに負担じゃなかったしね。何より、田植えが終わったあとに、この家で酒盛りするのが、米作り期間の『中締め』みたいで、楽しかったんじゃないかな」

そう言って、志乃さんは思い出し笑いの顔になった。

六月には、雨で(c)クズれてしまう畦の修復をしたり、シカよけを作ったりする。「この辺に住んでる人間の数より多いくらいだからね」と、志乃さんは真顔で言った。

七月には、三日に一度、田んぼの草取りをする。農薬を使わないから、雑草がどんどん伸びてくる。稲との生存競争で、稲よりも強くはびこる草だけを選んで、手で引っこ抜く。稲よりも先に朽ちてしまう草は、そのまま枯れて田んぼの養分になるので残しておく、という手法だ。

「これが結構大変。ひよつとすると、いちばん大変かもね。この辺でも真夏は暑いし、陰のまったくない田んぼの真ん中で、草の種類を見分けながら引っこ抜いていくんだから……(4)まあほんと、まったく、マーサさんもようやるわ」

九月には、徐々に稲穂が実って、重たく頭を下げ始める。この時期には鳥よけを田んぼの周辺に張り巡らせたり、かかしを作ったりしたりする。スズメやイノシシが稲穂を狙って到来するのだ。イノシシ対策には人の気配がいちばんということで、何人かの村人たちが集まって、寝ずの番をする夜もある。そんなとき、いままでは、ばあちゃんの家には一晩中人の出入りがあり、ちよつとしたお祭りのようだった。囲炉裏では芋汁が準備され、甘酒がふるまわれる。酒を飲んで寝こんでしまつては元も子もないので、あくまでもアルコール抜きで。ばあちゃんは思い出話に花を咲かせ、自分も眠らずに、村人たちにつき合った。

「なんだか特別なイベントみたいっすね」

人生がわくわくして言う、

「今年はあるがそのイベントの主催者になるんだからね」

志乃さんに A てしまった。

そして、十月。ついに、稲刈りのときを迎える。

その年の気候にもよるが、豊作の年は黄金色の稲田が目にも鮮やかに美しく輝く。いちめんに実った稲田の風景は、まさに圧巻だ。通常であれば、稲刈り機で(d)コウリツよく刈り取って、みるみるうちに田んぼを裸にしていく。が、ばあちゃんの田んぼはそうはいかない。最後まで手作業が原則なのだ。カマで刈り取り、束にして、稲木と呼ばれる木製の棚に穂を下にして掛けていく。これを「稲架かけ」という。

「それ、見たことある。ふさふさの、ちっちゃい屋根みたいなのでしょ？」

つぼみが言う、志乃さんが、「そ。これがふさふさじゃないと、農家の人は悲しいわけ」と言った。稲が実らなければ、すかさずになるのだから。

「この稲架かけの瞬間が、毎年、いちばん嬉しい瞬間ね。ああ、今年も実ってくれた、ほんとによかった、ありがとうってね」

志乃さんがしみじみと言う。「ありがとうって、誰に言うんすか」と人生が訊くと、

「決まってるでしょ、お米によ。実ってくれてありがとう、ってね。自然とそういう気持ちになっちゃうんだな、これが」

志乃さんの答に、「ああ、それはよくわかるなあ」と田端さんが B 。

「なんだか、無性にありがたい気分になるんだよ。ほかの野菜の収穫のときでも、もちろんそうなんだけど……やつぱり、お米は特別だね。生きてる証っていうか。自然と、命と、自分たちと。みんな引くくめて、生きるばかり。そんな気分になるんだ」

へえ、と人生は思わず声を漏らした。

生きるばかり。なんだかヘンテコだけど、そうとしか言いようのないフレーズ。その言葉が、ふっと手を伸ばして、人生の心の表面にそっと触れた気がした。

「そうね。みんなで生きてるって感じ。マーサさんの田んぼは、耕さないし農薬も使わないから、ミミズやカエルやゲンゴロウとか、生き物がたくさん棲息してるの。ちゃんとして食物連鎖が起こって、命のリサイクルがあつてね。みんなで手を結び合って生きている感

じが、いつそうするのよね」

ふむ、と田端さんが、感じ入ったように鼻を鳴らした。

「雑草や害虫を殺さず、むしろ自然の食物連鎖や、生存競争に任せるっていう考え方なんだね。ユニークだなあ」

(原田マハ『生きるぼくら』徳間書店)

(注)

「おばあちゃん(ばあちゃん)」「・・・人生とつぼみの祖母であるマーサさん。

「つぼみ」・・・人生の父の再婚者の連れ子。いじめられたのがきっかけで対人恐怖症になる。人生と同じくマーサさんからの年賀状を読みやってきた。

「田端さん」・・・人生が働く高齢者施設の介護士長。人生のことを気にかけてくれる人物。

「志乃さん」・・・以前からマーサさんの面倒をみてくれている。人生のよき相談相手。

問一 傍線部(a)～(d)のカタカナを漢字で答えなさい。

(a) ムダ (b) サめ (c) クズれ (d) コウリツ

問二 傍線部(1)「自分の耳が、心が震えるのを感じた」とあるが、心が震えたのはなぜか。説明しなさい。

問三 傍線部(2)「希望」とあるが、ここという希望とはどのようなことか。最も適当なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア、何よりの好物だった母が漬けた梅干しを入れたおにぎりを食べることに。

イ、「ありがと」と言い続けることで、ばあちゃんに伝わる日がくること。

ウ、ばあちゃんの田んぼでとれたお米で、おにぎりを作ってもらうこと。

エ、自分が作ったお米で、ばあちゃんにおにぎりを作ってもらうこと。

オ、ばあちゃんの田んぼでとれたお米で、高級レストランに負けないおにぎりを作ること。

問四 傍線部(3)「目を見開いて」とあるが、人生とつぼみが目を見開いたのはなぜか。説明しなさい。

問五 傍線部(4)「まあほんと、まったく、マーサさんもようやるわ」に込められた志乃さんの思いとして、最も適当なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア、「自然の田んぼ」にこだわるあまり、大変な仕事をするはめになるマーサさんに対して哀れんでいる。

イ、草の種類を見分けながら引っこ抜くことができるマーサさんに対して、その知識に感動している。

ウ、真夏の暑い時に、陰のまったくない田んぼの真ん中で草取りをするマーサさんに対して驚いている。

エ、目が回るほど忙しい農家の人たちに、田んぼの手伝いをお願いするマーサさんに対して困惑している。

オ、いちばん大変かもしれない真夏の草取りをするマーサさんに対してあきれながらも尊敬している。

問六 ☐ A・Bにあてはまる慣用句として最も適当なものを次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

A (ア、口を挟まれ イ、鼻で笑われ ウ、釘を刺され エ、眉をひそめられ オ、水を差され )

B (ア、舌を巻いた イ、相槌を打った ウ、口裏を合わせた エ、口を添えた オ、軽口をたたいた )

問七 次の文章の ☐ I～IVにあてはまる語句を、それぞれ文中から抜き出しなさい。

マーサさんの ☐ I では、耕さないし農薬も使わないから、田植えや草取りなど的大変なことが多い。そのため村人たちの協力を得て、みんなで農作業は進められる。また、 ☐ I であるため、生き物がたくさん住んでいて ☐ II や生存競争が起こり、 ☐ III が行われている。このようなことから、みんなで生きてるといふ感じをいつそう持つことができ、草や虫、そして自分たち自身もすべて引つくるめて ☐ IV であることを実感することができる。

正答例 & 解説 2026 年度 一般選抜【国語】

正答例

|    |           |                                                |     |           |           |
|----|-----------|------------------------------------------------|-----|-----------|-----------|
| 一  | 問一        | (a) 若干 (b) 圧倒的 (c) 自負 (d) 鮮度 (e) 論 (f) 効       | 大問  | 問         | 配点        |
|    | 問二        | 一味                                             | 1   | 1         | 各 1 点 × 6 |
|    | 問三        | 電子機器との出会いを遅らせること                               |     | 2         | 4 点       |
|    | 問四        | 魔法の道具                                          |     | 3         | 4 点       |
|    | 問五        | 一 [生身] 読み聞かせ [受け身] ビデオ (動画も可)                  |     | 4         | 4 点       |
|    |           | 二 [生身] 生きた言葉によるオーダーメイドの読書だから。                  | 5-1 | 各 3 点 × 2 |           |
|    |           | [受け身] ただ時間通りに画面は流れてゆくから。                       | 5-2 | 各 4 点 × 2 |           |
|    | 問六        | エ                                              |     | 6         | 3 点       |
|    | 問七        | 絵本があいだにあるからこそ聞いたことだなと思ったから。                    |     | 7         | 4 点       |
|    | 問八        | 五感を刺激されることがないから。(風や匂いや痛み等を感じることがないから。も可)       |     | 8         | 4 点       |
| 問九 | 隠喩 (暗喩も可) |                                                | 9   | 3 点       |           |
| 二  | 問十        | 大自然の中で、遊びほうける冒険の日々は、まさに自分自身がマリオになったような気分だったから。 |     | 10        | 4 点       |
|    | 問一        | (a) 無駄 (b) 覚 (c) 崩 (d) 効率                      | 2   | 1         | 各 1 点 × 4 |
|    | 問二        | 具体的で現実的な小さな希望を持つことが大切だという話を聞いて感動したから。          |     | 2         | 6 点       |
|    | 問三        | エ                                              |     | 3         | 5 点       |
|    | 問四        | ばあちゃんが田端さんの言葉に大きくなずいたことにたいへん驚いたから。             |     | 4         | 6 点       |
|    | 問五        | オ                                              |     | 5         | 5 点       |
|    | 問六        | A ウ B イ                                        |     | 6         | 各 4 点 × 2 |
|    | 問七        | I 自然の田んぼ II 食物連鎖 III 命のリサイクル IV 生きるぼくら         |     | 7         | 各 4 点 × 4 |
|    |           |                                                |     |           | 合計 100 点  |



大学受験のエキスパート！  
が詳しく解説！

攻略ポイント

全体で大問が2題で、大問一は評論で設問数が10問、大問二は小説で設問数が7問。設問内容は、漢字問題、空欄補充問題、抜き出し問題、内容説明の問題、理由説明の問題、心情説明の問題である。全体的な難易度は高校基礎から標準レベルで、設問は基礎的な学力を問うものであり、難問レベルのものはない。漢字の読み・書き、抜き出し、選択問題を含む記述式で出題されている。文章は比較的読み取りやすい内容であり、大問一の評論は3400字程度、大問二の小説は3500字程度で、ともに標準的な文量である。設問については、正確に文章内容を読み取る力を問うものである。学校で学習する内容を理解して、丁寧に文章を読み、設問に対して正確に解くことを身につけよう。そのうえで、練習問題やびわこ学院大学の過去問題を解いてしっかりと準備しよう。過去問題は必ず時間をはかり、2回以上解いて、読むスピードや解くスピードといった時間配分を確認しておこう。

大問一

問一は漢字の書き取り問題である。合格に向けて、全問正解をめざそう。漢字問題は国語の基礎知識を問うものであり、おぼえていれば正解することができる。それゆえ、漢字の問題集を利用して集中的にインプットしよう。例えば、「一日に10問解く」「まちがえたら3回ずつ書いて練習する」というように、目標やルールを決めて取り組んでいこう。とくに漢字の書き問題では、読みやすい字で、楷書で丁寧に書き込もう。

問十は理由説明の問題である。「オレ」が「今マリオなんだよ!」と思ったと判断できる理由を説明する問題。傍線部の主部にあたる「オレ」の説明がされている箇所に着目してみよう。そうすれば、次の段落の冒頭二文にある「大自然の中で、友だちと一緒に暗くなるまで遊びほうける日々……まさに自分自身がゲームの主人公になったような気分だったのだろう」という解答根拠を特定できる。記述式の問題では、〈解答根拠を明示する〉ということ意識して、答案作成をおこなおう。

本番までの記述練習として、「自作答案を作る→解答例を確認する→解答例と見比べて不足している要素を確認する→解答例を見ないでもう一度自作答案を作る(答案のリライト)」の手順でトレーニングをおこなおう。決して解答例を写しただけで満足することはないようにしよう。

大問二

問五は心情説明の問題である。心情を説明する問題では、〈誰の心情が問われているか〉ということを確認しよう。ここでは「志乃さん」の心情が問われているのであり、他の登場人物の心情とは区別して根拠を拾う。傍線部は「志乃さん」のセリフであり、その冒頭に「これが結構大変。ひょっとすると、一番大変かもね」とある。また、傍線部自体「まあほんと、まったく、マーサさんもうやるわ」というセリフで、「あきれながらも尊敬している」という心情を表現している。これらの根拠を含む「オ」が正解となる。心情問題でも、本文根拠をふまえて判断しよう。

問六は空欄にあてはまる語句を選ぶ問題である。辞書の意味を踏まえて判断しよう。当てはめて読むと正解らしいと思えるというような曖昧な感覚で判断しないように気をつける。日頃からコツコツと継続して語彙力強化に取り組もう。

- ◎この問いを例題にして学ぼう！
- ① 慣用句などの語句を選ぶ問題では辞書の意味で判断する。おぼえていれば得点になる！
  - ② 語彙力対策を計画的におこなおう。問題集や国語の資料集を使って集中的に取り組む。  
(例) 問題集を1日に2ページやる (例) 1日10問ずつ取り組む
  - ③ とくに慣用句やことわざ、四字熟語は頻出。しっかり準備しよう。